



M. J. C. Schouten. *Leadership and Social Mobility in a Southeast Asian Society: Minahasa, 1677-1983*. Leiden: KITLV Press, 1998, 334p.

「オランダ第12の州」と謳われたミナハサ (Minahasa) は、世界経済への統合、キリスト教の浸透、植民地統治や独立後の政治変動を通じ、いかなる社会変容を経験したのか。そして、外部要因をいかに社会内部に取り込み、またいかに西欧世界との接触以前との連続性を保持してきたのか。本書は、インドネシア共和国・北部スラウェシ・ミナハサ地方を中心にスペイン・ポルトガルとの接触、VOC時代、オランダ植民地時代を経てインドネシア共和国独立後、スハルト体制までの5世紀に及ぶ政治・経済・社会宗教的変容と村落リーダーシップに関し、歴史人類学的考察を行っている。

著者は、北スラウェシ州都、Manadoより40km南に位置する Sonder 地方にて人類学的調査(1981-84)を行い、またミナハサの西欧世界との接触前後の状況に関し、VOC、オランダ宣教会(Nederlandsch Zendinggenootschap: NZG)、植民地地方行政記録などの歴史史料を駆使し、動的に地方史を再構成している。なお、本書は、1993年に著者がアムステルダムの Vrije Universiteit に提出した博士学位論文に加筆・修正し出版したものである。

本書は大まかに4部から構成される。以下は各章の要約である。序論にて上述の分析枠組みを述べた上で(第1章)、西欧世界との接触前後のミナハサ社会の様相に焦点が当てられる。メラネシア社会という Big Man 的な霊力(keter)をもつ指導者は、供宴など富の誇示や首狩りを通じ共同体(walak)内リーダーシップの威信を高め、追従者との間に互恵的支配体系を形成していた(第2章「探索されるミナハサ——平等、階層性、移動性」)。18世紀初期、交易中心の VOC との接触は、walak 首長たちの権力獲得手段となり、ミナハサ地方に恒常的であった walak 間の敵対関係をさらに助長した(第3章「初期西欧人の介入——1523-1817」)。19世紀に入り、ナポレオン戦争に引き続く英国支配の後、

コーヒー・米など換金作物の栽培義務化・奨励を通じ、オランダ植民地統治がかつてない規模でミナハサに浸透する。資本経済への統合は、課税制度による貨幣経済の浸透に加え、伝統経済と市場経済とが並存し労働力が伝統セクターから常に供給されることによって促進されていった。この間、生存農業に押しやられた住民の抵抗は、以前の戦闘から日常的なサボタージュ・逃亡・耕地の遺棄へと移行していく(第4章「植民地強制と経済変容——1800年代のミナハサ」)。

次に、著者は Sonder 地方のリーダーシップを例に植民地統治下ミナハサ社会の変容を詳述する。好戦的な Sonder 住民の植民地政府への服従、「パクス・ネルランディカ」の到来を促したのは、walak 首長の役割の変化にあった。植民地行政がヨーロッパ人と住民との媒介者を要請した結果、「首長の親族」と「追従者」という社会階層の分離が進行する。ジャワ戦争への兵役を契機とし植民地行政との関係を深化させた首長たちは、伝統的権限(役務の要請)と新たに獲得した行政的権限(徴税)とを、自己の富の集積と地位の安定化に積極的に活用する。村外婚の姻戚関係ネットワーク強化等によって植民地官僚職の世襲化に成功した首長の親族は、貴族階級(bangsa)を形成していった(第5章「英雄から貴族へ——19世紀の首長たち」)。また植民地経済への統合によって生じた農耕周期の変化は、土着の信仰体系に基づく農耕儀礼の遂行を困難にさせ、新たな宗教たるキリスト教の受容の素地ともなった。住民にとって、キリスト教への改宗は、教会(NZG)および州政府の提供する学校教育を受ける機会と同等に捉えられ、教員・牧師助手などの地方知識人が形成される契機となった。また教育機会に恵まれない場合、多くの住民にとっては、植民地軍への入隊が貧困からの貴重な脱却手段であった。これらは、ほぼ世襲の植民地官僚エリートと並び納税・賦役が免除される19世紀末のミドル・クラスを形成する(第6章「19世紀におけるキリスト教、学校教育と社会の分化」)。19世紀末からの植民地行政の効率化の潮流は、行政官吏の世襲制撤廃と行政区域の改変とを推し進めた。行政単位が walak 共同体からミナハサ議会(Minahasaraad)の議員選挙区へ改変されたことで、議会議員がミナハサの新たな

有力者となっていく。その一方、植民地統治の二重構造により歴史的に創られ「貴族階級」化した首長たちは、旧来の住民との関係を失い、官僚機構の徹底化のなかで公僕化され、20世紀には急速に影響力を失う（第7章「正統性と効率の狭間で——首長とその地位 1865-1942」）。次に、著者は、ミナハサ地域全体の社会変容から視点を村落レベルに移す。Sonderの首長であり植民地政庁から初代村長と認められた H. W. Dotulong の専制的リーダーシップと Polandos 村を中心とした walak 住民との関係、また Sonder 地域の各村落におけるキリスト教信仰の受容と社会変容について詳述したうえで（第8章「Sonderの村落——内外関係」）、19世紀末以降の同地方の市場経済化の波と、住民の新たな経済活動への参入に焦点を当てる。1870年代のヨーロッパ人の土地所有・経済活動の自由化と、1890年代のコーヒー強制栽培の撤廃により、Sonder 地方住民もまた新たに市場参入すると同時に世界市場へと組み込まれていく。20世紀初頭に最盛期を迎えたコブラ産業は大恐慌後には衰退し、莫大な負債に陥った住民のほか、高地の人口密集地域住民の貧困緩和策として、ミナハサ南部への移住・開拓も推進されるなど、市場経済化の波はミナハサの各地域に経済的不均衡を生みながら進行した（第9章「貨幣経済化と分化 1890-1942」）。20世紀に入ると、リーダーシップは教育を媒介として自らを確立した知識人へと移行する。オランダ語を獲得し、教育・教会・行政分野の重要な地位を占めるに至ったミナハサ人知識人たちは、植民地支配の限界を認識し、オランダへの忠誠を謳いつつも、宗主国の11州と同様の権利を主張する戦略を使用し教育機会の均等と福祉向上を目指した（第10章「教育と解放 1900-1942」）。

最後に著者はオランダの植民地支配終焉後へと視点を移す。日本占領期、インドネシア独立戦争、ブルメスタ反乱、新体制へと続く政治変動は、つねにミナハサを大規模な戦乱に巻き込み村落レベルの大きな変化を与えてきた。その一方で、ヨーロッパ人

との接触以前もしくは植民地統治下との連続性もまた保持してきた。経済的には、20世紀初頭に試験的栽培が行われ Polandos 村で小規模に続けられていた丁子栽培が、1920年代以降の丁子タバコ生産の国内的需要から、Sonder の主要な商品作物となる。一方、依然、富の象徴とされる水田所有は放棄されず、単一作物栽培のリスク分散手段として Sonder 外の小作労働者によって耕作される。宗教的にも土着の信仰体系が遺棄されることなく日常生活およびキリスト教諸儀礼と混在し保持された（第11章「変化のうねりと連続性 1942-1983」）。次章では、Polandos 村のミクロ的な人間関係を対象として、新体制下での経済的成功への住民の新たな戦略の模索、リーダーシップの規範と行動とに関して分析・考察を加えている。経済的努力によって蓄積した富は、資本化し再投資されるよりも、伝統的互惠関係に基づく共同体住民への富の再分配が依然として重要とされる（第12章「地方リーダーシップのダイナミクス——1970、80年代」、第13章「結論」）。

本書の目的は、従来過度に指摘されてきたミナハサ人の西欧文化への適応性を部分的に修正し、彼らがいかに旧来の文化を継承してきたかを検証することにあった。読者は一読して、綿密な現地調査と史料探索に裏付けられた著者の試みが成功していることを知るだろう。理論的枠組みが不明確であることは否めないが、情報の豊富さに関して本書の価値を損なうものではない。従来ミナハサ研究に関しては、オランダ時代との関係性が深いがために、翻ってインドネシア独立後のイデオロギー的立場から歴史叙述がなされる傾向にあった。本書は、時代横断的な検証を試みることでナショナリズムの言説から意図的に距離をおき、時代のダイナミズムを持ち合わせたミナハサ住民の真の姿を忠実に描き出した労作といえるであろう。

（前川佳遠理・オーストラリア国立大学
客員研究員）